兵火に焼かれて ～室町・戦国時代の美原

鎌倉時代の終わりごろから南北朝時代にかけて、村落では「土豪・悪党」と呼ばれる新たな支配層が現われ、各地で争いが始まるようになると、美原でもさまざまな防衛施設が造られるようになりました。丘陵地形を利用して土塁を築いた平尾城や、平地の建物の周囲に濠をめぐらして、城館とした余部城や城岸寺城の他、黒姫山古墳も砦として利用され、南朝勢・北朝勢が一進一退の攻防を繰り広げました。ただし、城と言っても、天守閣を持つような大規模なものではなく、防御のための木の柵や土を盛り上げた土塁と、居住のための簡単な建物があった程度のようです。このうち、平尾城では、二度も合戦が行われたことが記録に見えますが、この二度にわたる平尾の合戦でも、南朝側は優勢を保つことができず、いずれも敗退しています。

その後、勢力を強大化させた足利氏が、京の室町に幕府を開くのですが、幕府の要職を占めた武士が内紛を起したり、お家騒動が起ったりして、このあたりは再び戦乱の地に陥ってしまいました。

内乱は、河内鋳物師がその本拠を移転する、大きな契機となりました。戦国大名は、武器の調達や城下町の建設などに、鋳物師を必要としたのです。

この時代、兵火によって焼失した神社や寺も多く、戦乱の激しさがうかがわれます。

ひとことコラム

楠木正成

楠木正成は、河内・和泉を本拠地とし、鎌倉幕府の御家人帳にない付近一帯の流通ルートを支配する土豪であった。元弘の乱で後醍醐天皇に応じて赤坂城に挙兵するが落城。翌年冬に再度挙兵、千早城に幕府の大軍を引き受けて、独自戦法で悩ませた。後醍醐天皇の建武の新政がはじまると、正成はこれらの軍功で、記録所寄人、雑訴決断所奉行人、河内・和泉の守護となる。1336（延元元/建武3）年12月、関東から上洛した足利尊氏を九州へ敗走させたが、5月に尊氏の東上を摂津国湊川に迎え撃って戦死。近年、能楽の観世家の系図が発見され、正成の妹の子が能楽を興した観阿弥であり、観阿弥の子が世阿弥であることが判明した。

城岸寺城跡

大饗城ともいい、楠木氏の一族である和田氏が居城をかまえたと伝えられています。正平7（1352）年の和田助氏の軍忠状（戦いの功労を書いたもの）に大饗城の名が見えます。周辺の地名に「城ヶ池」「城ヶ岸」「城の北」などが残っています。

城岸寺

余部城跡

余部城は、「城ノ山」「城ノ前」などの字名が、余部地区に残っているために、その存在が推定されていましたが、阪和自動車道の建設に伴う発掘調査で、東西約70m、南北約100mの規模が確認され、出土遺物から、13世紀の中頃から15世紀まで、建物が残っていたと推定されています。

楠公史蹟　平尾城址

平尾城跡

平尾東山にある平尾城址は、元弘2（1332）年、楠木正成（ひとことコラム参照）が築いた城塞跡で、俗に「ねはん」城とも呼ばれています。永徳2（1382）年に正成の三男、正儀が山名氏に敗れ、元中5（1388）年、その子正勝が、足利義満を討たんとして、逆に山名氏清のために討たれた古戦場です。今は石碑が一つたたずむだけで、悲劇の武将を今に語り伝えています。

「天下の台所」のおひざもと ～江戸時代の美原

江戸時代、「天下の台所」（ひとことコラム参照）と呼ばれた大坂の持つ経済力を恐れた幕府は、一人の大名に大坂の地を支配させるようなことはしませんでした。当時、大坂で最も大きな大名は、5万石（のちに6万石に加増）の岸和田藩でした。丹南藩や狭山藩は、いずれも1万石の大名で、城をもつことが許されておらず、それぞれの陣屋を、現在の松原市丹南と大阪狭山市池尻に築いていました。また、下の図のように、この美原の地は、いくつかの藩が領地とし、また幕府の直轄領も設けられていたので、隣同士の村が別々の領主の支配を受けることになっており、村同士が協力して領主に対抗するということが不可能なように仕組まれていました。しかし、それでも時には、年貢の軽減や流通の独占を排除するために、農民を中心とした一揆がたびたび企てられたことが、村々に記録として残っています。

文化９（1812）年村別領主支配図

ひとことコラム
天下の台所

大坂が「天下の台所」といわれたのは各藩が蔵屋敷を大坂に設けたことに起因する。年貢米、その他各藩の特産品は蔵屋敷で払い下げられ、売却されたが、この代金は各藩の財政上大きな比重を占めていた。江戸時代、蔵屋敷は交通の便の良い所、つまり河川に面したところにその殆んどが設けられた。更にその中のほとんどが堂島、中之島付近に設けられたという。文化11（1814）年には中之島に41、堂島に15の蔵屋敷が、また天保年間（1830-1834）には125の蔵屋敷があったと伝えられる。

江戸時代、農民は、「生かさぬように殺さぬように」という方針のもと、強力な支配体制下に置かれていました。「お上に逆らう」ことは、即、死を意味しました。それでも農民たちは、自分たちの生活を守るために、立ち上がらなければならないこともありました。美原でも、水利をめぐって、川上と川下の村では争いが絶えず、この窮状を打開するために、幕府に直訴した多治井の野沼某と菅生の角右衛門の2人が刑死したという話が伝えられ、多治井地区に「多治井村義人碑」が、菅生地区に「角右衛門治水頌徳碑」が建立されています。

おかげ参り

「ぬけ参り」とも呼ばれ、特定の年に流行した伊勢神宮参拝をいう。このおかげ参りのために整備された街道に作られた灯籠。

多治井村義人碑

多治井村義人霊菩薩

江戸時代、多治井村の干ばつの窮状を訴えるため直訴を行い、死刑にされた人をたたえるため建立されたもの。「お手と足とはお江戸に御座る首は田治井（多治井）の野沼塚」という歌が残っている。

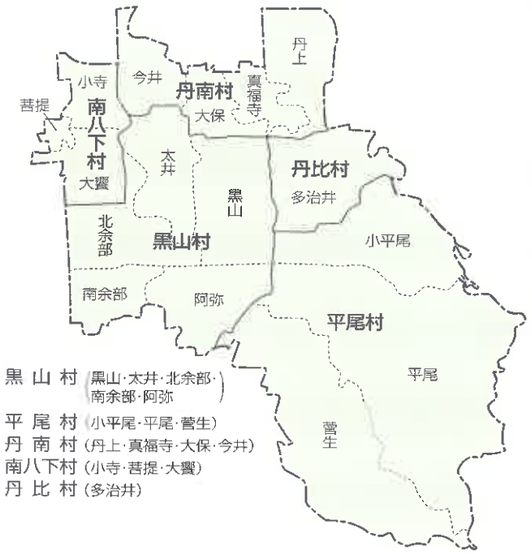
江戸時代の稲刈りのようす～『菅生天神宮縁起絵巻』より

新しい時代へ ～変わりゆく近代の美原

明治新政府が成立し、版籍奉還により、廃藩置県が断行され、江戸時代に美原の地に領地をもっていた丹南藩・狭山藩はなくなり、南河内郡ができるまでの間、堺県（ひとことコラム参照）に属することになります。堺県は、現在の奈良県を含める地域までを範囲としていました。

美原の村々は、明治22（1889）年の町村制の施行により、黒山村・平尾村・丹南村・南八下村・丹比村に再編されます。当時の美原は、田園地帯が美しいところであったと思われます。

明治22年、町村制の施行当時の美原の村々



ひとことコラム

堺県

明治初期の県。明治元（1868）年、大阪府管轄地のうち和泉国を分割して設置され、堺に県庁をおいた。翌年、河内県・狭山藩を合併。明治3（1871）年の廃藩置県後、伯太・岸和田・丹南・吉見の4県を統合して河内・和泉両国を直轄。堺県は現大阪府の約3分の2の面積を占めていた。現大阪府は旧国名の摂津の一部と河内・和泉の3国、略して摂河泉地域を占めているが、そのうち河内と和泉がかつての堺県であった。明治8（1876）年、奈良県を合併して大和国も管轄したが、明治13（1881）年、大阪府に合併された。東京・京都・大阪府の3府の内、最も狭小で、財政が弱かった大阪府を補強するため、わずか県治14年にして廃県、大阪府へ編入されたのである。

現在は、美原町内に、鉄軌道はありませんが、明治29（1896）年ごろに美原町域を走る鉄道計画がありました。平尾村出身の国会議員である出水弥太郎の書簡の中に鉄道計画の話が出ています。計画の鉄道は「狭山鉄道」で、天王寺から狭山を結び、平尾・黒山あたりを通る予定でしたが、明治30（1897）年に設立願書は却下になり、まぼろしの鉄道となりました。

明治31（1898）年　狭山鉄道却下後開通した近鉄道明寺線（旧河陽鉄道）

狭山鉄道却下の文書

戦後の教育改革を伝える『ふなと学報』

大正6（1917）年に、大阪府黒山実業学校が創設されました。男子部と女子部に分かれており、女子部は、黒山高等小学校の校舎内に設置され、大正13（1924）年に黒山高等実践女学校として独立しました。当時の校舎は、舟渡池周辺にあり、菅生神社への必勝祈願や勤労奉仕の様子など、戦時下の貴重な写真が残されています。堺方面から南河内地区の女子教育の中心校として多くの卒業生を輩出、地域の教育・文化に大きな役割を果たしました。戦後の学制改革で、黒山実業学校は大阪府立農芸高等学校に、黒山高等実践女学校は昭和27（1952）年に現在地の堺市西野に移転し、大阪府立登美丘高等学校となりました。

勤労奉仕に勤しむ黒山高等実践女学校の女学生たち

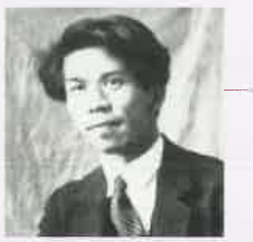
舟渡池のほとりの黒山高等実践女学校

美原に住み、美原をうたった

望郷の浪漫派詩人・伊東静雄が見た風景

伊東静雄は、日本語の響きの華麗さと、思索の深さを高く評価され、珠玉の詩篇は今なお色あせることなく、多くのファンをもつ詩人です。昭和十（一九三五）年、処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』が第二回文芸汎論賞を受賞、一躍日本浪漫派を代表する詩人となりました。伊東静雄は、昭和二十八（一九五三）年、当時の黒山村北余部に在住のまま亡くなりましたが、故郷長崎県諫早市では、諫早市制五十周年を記念して、平成三（一九九一）年から、「伊東静雄賞」を毎年実施、多くの詩人を輩出しています。

ひと・みはら



伊東 静雄

明治39（1906）年～昭和28（1953）年

伊東静雄は、現在の長崎県諫早市に生まれ、大村中学校（現大村高等学校）、佐賀高等学校（現佐賀大学）を経て、京都帝国大学文学部国文科に進んだ。在学中の昭和3（1928）年、懸賞募集児童映画脚本の童話『美しき朋輩達』が一等当選となり、映画化される。大学卒業後、大阪府立住吉中学校（現住吉高等学校）に就職し、生涯教職を離れなかった。昭和10（1935）年、処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』を刊行、萩原朔太郎に激賞され、一躍詩人としての名を高めた。昭和15（1940）年に第二詩集『夏花』を、昭和18（1943）年には第三詩集『春のいそぎ』を刊行した。昭和20（1945）年7月の空襲で、堺の自宅を焼かれ、南河内郡平尾村に移り、翌年さらに、黒山村北余部へ移った。昭和22（1947）年、最後の詩集『反響』を刊行、次第に散文的描写に変化しつつ、一段と内面的静かさと高みを獲得していった。昭和23（1948）年、学制改革のため、府立阿倍野高等学校に転勤。翌年、肺結核を発病、国立大阪病院長野分院に入院、闘病生活は最後まで続いた。昭和28（1953）年、大喀血で衰弱の末、死去。46歳の生涯だった。

昭和21（1946）年、伊東静雄は、友人に「私はこのごろ田舎に一軒家を見つけて移り住み、安楽な気持ちで一年ぶりに自由な生活ができて、喜んでいるところです」と手紙を書いています。空襲で家も蔵書も失い、文学の友を失い、家は粗末で、暮らしは貧しく通勤も不便ではあるけれども、伊東は、北余部の地に、故郷諫早を見ていました。平野が広がる牧歌的な風景は、伊東を慰め、「広々とした田圃の中で、雲が美しく、毎夕方、下駄をやつとはきなれた夏樹（長男）をつれて、散歩に出ます」と書きました。家を出た十字路には小さい地蔵の石の祠があり、小川にかかる石橋は久しく忘れかけていた故郷の原風景を追想させ、堰を切ったように数々の作品がうまれ、昭和22（1947）年、第四詩集『反響』が編まれました。白鳥の歌と呼ばれる、美しい詩集です。

北余部の祠
『夕映』に詠まれた石像

夕映

わが窓にとどく夕映は
村の十字路とそのほとりの
小さい石の祠の上に一際かがやく
そしてこのひとときを其処にむれる
幼い者らと
白いどくだみの花が
明るいひかりの中にある
首のとれたあの石像と殆ど同じ背丈の子らの群れ
けふもかれらの或る者は
地蔵の足許に野の花をならべ
或る者は形ばかりに刻まれたその肩や頬を
つついたり擦つたりして遊んでゐるのだ
めいめいの家族の目から放たれて
あそこに行われる日日のかはいい祝祭
そしてわたしもまた
夕毎にやつと活計からのがれて
この窓べに文字をつづる
ねがはくはこのわが行いも
あゝせめてはあのような小さい祝祭であれよ
仮令それが痛みからのものであつても
また悔いと実りのない憧れからの
たつたひとりのものであつたにしても